

2023.3.27

ステンレス、アルミニウムといった高い意匠性が求められる鋼板にとって、表面保護フィルムは不可欠な副資材。現在塩化ビニル製の商品が主流ながら、環境性の高い特性を有する「非塩ビ」製品の採用が広がりを見せるなど、業界を取り巻く状況は近年大きく変わりつつある。こうした表面保護フィルムの現状や将来展望を、フィルムの販売や加工を手掛ける城山の加藤隆介社長に聞いた。

(佐野 雄紀)

—表面保護フィルムのトレンドを伺いたい。

「世界的な環境意識の高まりを受け、鋼材の表面疵を防ぐフィルムにも一段とりサイクル性やCO₂削減が求められるようになつた。使用後に廃棄を伴うということもあるから、より環境性能に優れた製品を導入しようという機運が徐々に高まっている」

—具体的な動向を。

「現段階で技術開発中ながれは変わっていない。ただ塩

需要家が多く、依然その流

況と見て

いる」

—その理由は。

「塗装はまだ限定期間と見えており、ペットボトルのように再

生原料から別商品を生み出す

みに寄り添う形で、CO₂削減効果を明確にし、具体的目標を達成できるような取り組みをする」

「ポリ製」普及に力へ大きく貢献

脱炭素化社会



販売・加工の城山 加藤 隆介社長に聞く

工とポリエチレン製フィルムをすでに複数の通加工業者に利

用いた大企業もいる

—ポリ製フィルムの特長は何か。

—市場への浸透度合いをどう見るか。

—静電気の発生が少ないためほこりやスパークを防ぎ、温度による伸縮が軽微で季節に関わらず貼り付け作業が容易、優れた耐候性を持つとい

った優位性もあらながら、市

場浸透はまだ限定期間と見えており、塗装はまだ限定期間と見えており、ペットボトルのように再

生原料から別商品を生み出す

みに寄り添う形で、CO₂削減効果を明確にし、具体的目標を達成できるような取り組みをする」

「塗装フィルム、ポリ製

「かねて塩ビ製品を使用する需要家が多く、依然その流れは変わっていない。ただ塩

需要家が多く、依然その流

況と見て

いる」

—その理由は。

「塗装はまだ限定期間と見えており、ペットボトルのように再

生原料から別商品を生み出す

みに寄り添う形で、CO₂削

減効果を明確にし、具体的目標を達成できるような取り組みをする」

「塗装フィルム、ポリ製

フィルムにはそれぞれに独自の特性があり、両者が共存し

り、両者で横み分けをしなければならない。加えて、保護

ルムが決まるアルミ板は、一

方で50%以上の削減が期待できる場合もあり、カーボンニュートラル(CN)表現にも大きく貢献する」

た品質確認などの工数が

かり、向け先によつては工程

ルムを貼付するため、各ユ

ニタに働きかけなければならない

ず時間を要する恐れがある。

粘り強く活動を続けて目標を

クリアしたいところだ」

—採用拡大実現に向けた足元の課題について。

「開発、商品化から20年程

度と歴史が浅く、認知度が低

い。その反面、需要の裾野を

拡大するチャンスは大きいと

も言える。当社がユーザーの

要望、困りごとに丁寧に耳を傾けながら地道にPRを進

めて、徐々に浸透を図っていきたい」

—塗装フィルム、ポリ製

フィルムにはそれぞれに独

特徴があり、両者が共存し

続けることに変わりはない。

その中でもポリ製商品はリサ

イクル性、CN対応などト

タルでの優位性が高い点をア

ピールし、採用例が増えるよ

う努める」